【研究ノート】

神仏習合研究のこれから [1]

The Future of Shinto and Buddhism Research

東海林　克也*
SHOJI Katsuya

［要旨］
現在の神仏習合研究は多くの研究成果が発表されている。これは神仏習合に関する関心の高さともいえる一方で、研究がある程度安定し円熟していることも事実である。
今後の研究課題は、現在の神仏習合研究の基礎を築いた辻善之助・津田左右吉の学説の学問的批判を加えることにより、両氏の研究を超えていく必要がある。その過程で、神仏習合という語・概念の再考、神仏習合の中で中国仏教が影響を与えている度合い、民衆はなぜ神仏習合を受け入れたのか、といった学際的総合的な神仏習合研究の必要性があることを指摘した。
キーワード：神仏習合研究、学際的研究、民衆思想

1. はじめに

現在、多くの神仏習合研究に関する論文が発表されている。国立情報学研究所が運営する術情報データベース CiNii では神仏習合をキーワードに検索すると 360 件の検索結果が表示される [2]。また東北大学大学院文学研究科日本思想史研究室が運営する日本思想史文献データベースで神仏習合をキーワードに検索すると 370 件の検索結果が表示される [3]。このような神仏習合に関する研究論文数は神仏習合に関する興味関心の高さであると同時に多くの先学者諸氏による不断の努力の成果でもある。

しかしながら、現在の神仏習合研究がある程度円熟しているのも事実である。そこで本稿は神仏習合研究をまとめながら、今後どのような研究課題が残されているのかを提示する。

2. 日本宗教の特徴である神仏習合とその概念・現象

日本宗教の特徴は自然信仰や神祇信仰、外来の宗教や文化が混ざり合い、日本とい

＊立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科博士課程後期課程修了生

う地に適合するように独自の発展を遂げてきたと指摘する事ができる[(4)]。それと同時に日本宗教は自然信仰・神祇信仰と仏教を含めた外来の宗教が融合しているという点を述べることができる[(5)]。

このように、日本宗教が在来の信仰と外来の宗教もが融合していることは、三橋正も同様の指摘している通りである[(6)]。

前述の通り、日本宗教の特徴の一つである神仏習合とはどのような概念・現象なのであろうか。そこで論考を進めていくにあたり先学者諸氏がどのような認識・理解をしているのかを確認する[(7)]。

鈴木正崇は「日本の自然発生的信仰としての神道と外来の仏教との融合およびその結果生じた諸現象をいう」[(8)] と述べている。

また菅原信海は「神仏習合とは、我が国に仏教が伝来してから、日本の神と仏がどのように結びついたかの現象である」[(9)] と規定しその現象は「神道とも仏教ともいえない新しい信仰をつくり上げ、我が国の宗教に新しい現象を創出している」[(10)] という理解を示している。

さらに高取正男は「神仏習合とは我が国固有の神祇信仰と仏教との融合であり、その結果としてあらわれた諸現象をさす言葉である」[(11)] と理解している。

加えて義江彰夫は「神祇信仰と仏教が複雑なかたちで結合し、独特な信仰の複合体を築いたものをいう」[(12)] と規定している。

最後に速水侑は「在来の民俗信仰としての神祇信仰と外来の新宗教としての仏教が接触融合する過程で形成される一連の宗教現象」[(13)] と述べている。

以上のように先学者諸氏が考える神仏習合の概念を確認してきた。ここから見えたこととして、程度や表現に差はあるとはいえ「神道と仏教とが融合しておきた信仰形態と諸現象」ということが共通して見出すことができる。本論においても、この共通する「神道と仏教とが融合しておきた信仰形態と諸現象」を概念・定義として論考を進めていく。

3. 神仏習合研究の問題

神仏習合研究に関しては多くの論文が発表されていることは「はじめに」で述べたとおりである。ここでその全てを上げることは紙面の都合不可能であるが、今後の研究発展のため、可能な範囲での研究問題についてまとめていく。

曽根正人はこれまでの神仏習合研究史をまとめ、「『神仏習合』は日本思想の根幹をなす独自文化の様相である。こうした日本特有の現象としての『神仏習合』の概念は、近代歴史学の誕生以今日まで維持されてきた。」[(14)] と述べている。

また義江彰夫は神仏習合研究について「神仏習合という日本独特の宗教構造」[(15)] という考察対象であったことを述べている。

さらに三橋正[(16)] は神仏習合研究について「神仏習合は、日本における仏教と神道（神祇）の接触による日本宗教の諸現象を示す語として使われている。仏教のような『普遍宗教』と神崇拝のような『基層信仰』の融合という現象は世界に共通しているが、日本では平安時代に成立した本地垂迹説の理論が注目され、その圧倒的な影響下にあっ

た中世における特異な宗教のあり方を解明する研究」が続けられてきたと述べている。続けて三橋は「『神仏習合』研究の最大の問題点は、現象面では神仏習合という融合の側面に、時代としては中世に偏重した形で進められたことである。」と指摘する。

以上のように神仏習合研究史をまとめたうえで先学者諸氏が課題をまとめると、二点の課題が浮かび上がる。つまり神仏習合研究の問題は①神仏習合は日本国内のみの宗教現象であり、②中世を中心とした研究時代に主眼が置かれている、ということである。

このような研究課題について現在、吉田一彦らを中心に神仏習合全体の見直しが提示されている。

吉田一彦[17]は神仏の習合について「アジアの多くの国や地域に仏法と神信仰の融合が見られるから、神仏の融合は日本独自の宗教現象とは言えない。」と述べている。加えて吉田は「アジアには広い範囲に仏法が流通し、多くの人々に信仰されている。（中略）仏法が広く流通している国や地域には、また神信仰が存在し、仏法は神信仰と複合し、あるいは融合して、何らかの連関を有するのが一般的である。」と述べるように、神仏習合自体が日本独自の文化・現象ではないことを指摘している。吉田が神仏習合は日本独自の現象ではないと述べる理由として上げているのが中国文化の日本受容である。吉田は過去の発表において、日本の神仏習合は「中国で説かれていた仏法と神信仰をめぐる思想・用語の強い影響を受けた」[18]とか「中国仏教には、神を『善神』『護寺善神』『寺神』『護塔善神』、あるいは『護法神』などと称して、僧や寺さらには仏法を守護する存在と位置づける思想が見られる」[19]と述べるなど、日本の神仏習合は中国仏教の影響を強く受けていたことを指摘する。

さらに寺川真知夫は日本文学研究の視点から神身離脱説について「神身離脱を語る現象は中国文献に見られ、外来伝承を視野に入れて理解するべきである」[20]と指摘している。

以上のように、現在における神仏習合研究の課題をまとめた。つまり、神仏習合研究をより深化させるためには、神仏習合は日本独自の宗教現象ではないということを受け入れつつ、日本思想史をはじめ、中国史、仏教史、日本文学など学際的な視点で大きな視野をもって研究していく方向性が見えてきたといえる。

4. 辻善之助・津田左右吉の研究の再考と吉田一彦の指摘

前述したように神仏習合研究は学際的で、より大きな視野をもって深化させていくという方向性を指摘した。

その中で、研究者は具体的にどのように神仏習合研究を進めていくべきであろうか。

神仏習合研究を再考する上で吉田一彦は「辻善之助パラダイム」[21]の脱却を唱えている[22]。吉田は辻の研究の最大の特色は「神仏習合の『思想』を日本一国内で成立し、発展したものだと跡づけるところにある。」[23]と論じる。

また吉田は津田左右吉[24]の神仏習合研究について「日本一国史の枠組みからではなく、中国思想の伝播、交流を視野に入れた研究を行っている。（中略）日本の神道は中国思想の影響を受けており、それによって豊かなものになったと構想しているので

ある。これは文化交流史の視座に立脚する研究と評価される」[25] としている。その一方で津田の研究には二点の問題があるとする。

一点目は、津田が神は輪廻の中で苦しんでいるという論考[26] について重要であるにもかかわらず、「その指摘が『高僧伝などにも記してあるから』の一句で説明終わりになっていることである。（中略）津田の記述はあまりに短文で後進の研究者に気づかれず、ために後続の研究は進展せず、長く眠ってしまった。」[27] と指摘する。

二点目は、古代の神観念を考察している部分（神前読経や神宮寺建立）において「神前読経などは神に祈願するのと同じように一般からは見られていたであろう」[28] と推測し「従ってこれは、特殊の知識人の間に形づくられた思想が一般の民間信仰とは離れたものである、ということの一例にもなるのである。」[29] という部分である。この考察に対し吉田は、「たしかに、こうした思想を中国から受容したのは都の学僧をはじめとする知識人階層だったろう。（中略）しかし、だからといって、民衆を含む一般の人々が、神も死ぬとか、神も輪廻の世界で生死を繰り返して苦しんでいると考えるに至ったとは筆者も推定しない。そこまで全面的に仏法の思想の影響下に至ったわけではないだろう。（中略）一方の神信仰の側も、仏法のそうした思想を部分的に受け入れ、それを活用することで自らを発展させていった。両者は融合していったのである。」[30] と述べるように、一方的に仏家の思想であるとか、一般民衆が神は輪廻を繰り返していると理解していたと断定することの危険性を指摘している。

5. 今後の神仏習合研究について

以上のように辻善之助・津田左右吉の研究を引き継ぎながらも、両氏の研究から脱却することが神仏習合研究を深化させることにつながるという、吉田一彦の指摘をまとめた。そこで吉田の指摘も含め、今後の神仏習合研究に必要なことをいくつか提示したい。

まず、吉田一彦は神仏習合研究の新しい地平について以下の四つを上げている[31]。

①日本一国史の枠組みを脱却して国際的視座からの神仏融合の研究を推進する。
②国際的視座からの研究においては、国や地域の相互の影響関係を解明するとともに、それを国際比較研究の段階へと発展させる。そしてそれによって、日本の宗教の歴史と文化をアジアの文化の中に位置づける。
③「本地垂迹説」の成立過程をより実証的に明らかにし、辻説に代わる本地垂迹説成立論を再構築する。
④〈辻善之助パラダイム〉とともにある「神仏習合」の概念・用語を批判し、それに代わる用語を提示する。

このような吉田の指摘は、今後の神仏習合研究をより深化させるための道標となるだろう。

吉田が述べるように、日本の神仏習合に中国仏教の影響が一定数あったことは事実であろう。しかしどの程度中国仏教の影響があったのかについてはより慎重な考察が

必要である[32]。

さらに、曽根正人が「神仏交渉の起点がインド仏教にあることは、明白なのである。実はインド仏教のこうした様相は、早くから中村元氏などのインド仏教学者によって指摘されていた。」[33][34] と指摘しているように、各分野単独のみでの研究は重要な研究発表が関連領域で受け流されてしまう可能性がある。このような事態は研究分野において重大な損失である。

また、現在の神仏習合研究は習合理論に重きが置かれた研究が行われていることである。神仏習合の理論が中国仏教に求められることには一定の理解ができ、垂迹や本地の理論なども神仏習合を構成する必要な要素である。しかしまた別の視点で必要なものは、神仏習合という思想・現象などを民衆などがなぜ受け入れたのかという問題である[35]。神仏習合が日本に流布する過程には仏教僧や権力者が必要だが、それを受容する民衆の存在も忘れてはならない。

神仏習合は、日本思想史学、歴史学、宗教学、日本文学、仏教学、神道学、中国思想史学、インド仏教学などあらゆる分野に重なる研究分野である。今後各分野を横断する学際的総合的な神仏習合研究が必要である[36]。

6. まとめ

現在までに、神仏習合研究は一定の論文が発表されると同時に円熟した研究分野である。しかしながら多くの研究課題が残されている。現在の神仏習合研究の基礎を築いた辻善之助・津田左右吉の学説について学問的批判を加えつつ、両氏の研究を超えていく必要がある。その過程で、神仏習合という語・概念の再考、神仏習合の中で中国仏教が影響を与えている度合い、民衆はなぜ神仏習合を受け入れたのか、学際的研究総合的な神仏習合研究の必要性があることを指摘した。

■註

(1) 神仏習合という概念や用語については吉田一彦が「神仏の融合は日本独自の宗教現象とは言えない」及び「『習合』という言葉は、室町時代の神道家によって提唱された、ある特定の思想的立場からの概念語だった」（吉田一彦、2021、「東アジアの神仏融合と神仏融合」吉田一彦編『神仏融合の東アジア』名古屋大学出版会）という指摘や三橋正、ルチア・ドルチェが「諸現象の実態解明と合わせて適切な用語を模索し、場合によっては複数の用語を使い分けていく作業が必要になるであろう」（三橋正、ルチア・ドルチェ編、2013、『「神仏習合」再考』勉誠出版）という意見がある。以上のことから本来は「神仏習合・融合」という表記が必要であると考えられるが、本論では便宜上「神仏習合」という語を用いる。

(2) CiNii キーワード「神仏習合」で検索した場合。（https://ci.nii.ac.jp/）最終アクセス日 2021 年 10 月 20 日

(3) 日本思想史文献データベース内でキーワード「神仏習合」で検索した場合。（http://www2.sal.tohoku.ac.jp/dojih/）最終アクセス日 2021 年 10 月 20 日

(4) 伊藤聡は日本宗教について、「中国大陸や朝鮮半島から、文物を継続的に受容し、それに改変を加えながら独自の文化を形成してきた地域である。宗教についても、古代から近代に至るまで、さまざまな信仰、宗教思想、宗教儀礼が大陸・半島からもちこまれ、それらが日本宗教の主要な構成要素」であることを指摘している。伊藤聡、2020（令和 2 年）、「宗

教の融合と分離・衝突」伊藤聡・吉田一彦編『宗教の融合と分離・衝突』）

(5) 伊藤聡によれば「外来宗教はさらに、在来の信仰との軋轢を生みつつもそれらを変化させ、また自らも日本の文化的・社会的環境に適応すべく変質した。あるいは両者が融合してあらたな宗教形態を作り出すこともあった。しかも、このような現象は歴史を通じて繰り返されたのである」と述べている。（伊藤聡、2020（令和 2 年）、「宗教の融合と分離・衝突」伊藤聡・吉田一彦編『宗教の融合と分離・衝突』））

(6) 三橋正は特定の宗教や思想を指していないが、「日本における宗教の在り方は、単一宗教がすべてを包括するのではなく、様々な宗教が併存しているのである。これを日本人の側から見れば、一生のサイクル、年中行事、暦など様々なレベルにおいて多様な宗教を必要に応じて活用しているということになる。そして、この諸宗教を使い分ける構造こそが、長い歴史の中で培われ、伝統の中で社会通念となった『日本的な』宗教形態といえるのである」と述べている。三橋正、2000（平成 12 年）、『平安時代の宗教儀礼』続群書類従完成会）

(7) 本来、神仏習合の概念・現象については多くの項を用いた議論をしなければならない。しかし、私は博士学位請求論文において神仏習合の概念・現象ついて、定義付けを行った。そのため、本項での神仏習合の概念・現象についての定義は、先学者諸氏の認識を確認するに止め、博士学位請求論文に基づいた定義を用いて論考を進める。

(8) 鈴木正崇、1993、「神仏習合」森岡清美・塩原勉・本間庸平編『新社会学辞典』有斐閣

(9) 菅原信海、2005、『神仏習合思想の研究』春秋社

(10) 菅原信海、2005、『神仏習合思想の研究』春秋社

(11) 高取正男、1982、『民間信仰史の研究』法蔵館

(12) 義江彰夫、2007、『神仏習合』春秋社

(13) 速水侑、1986、『日本仏教史古代』吉川弘文館

(14) 曽根正人、2021、「多神教としての仏教とその東流」吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版

(15) 義江彰夫、2007、『神仏習合』春秋社

(16) 三橋正、2013、「「神仏習合」を再考するために」ルチア・ドルチェ・三橋正編『「神仏習合」再考』勉誠出版

(17) 吉田一彦、2021、「東アジアの神仏融合と日本の神仏融合」吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版

(18) 吉田一彦、1996、「多度神宮寺と神仏習合 ― 中国の神仏習合思想の受容をめぐって」梅村喬『古代王権と交流 4 伊勢湾と古代の東海』名著出版

(19) 吉田一彦、1996、「多度神宮寺と神仏習合 ― 中国の神仏習合思想の受容をめぐって」梅村喬『古代王権と交流 4 伊勢湾と古代の東海』名著出版

(20) 寺川真知夫、1993、「神身離脱と神宮寺縁起」『仏教文学』第 18 号

(21) 吉田一彦、2021、「神仏習合説形成史の批判的考察」吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版

(22) 吉田一彦は辻善之助・津田左右吉の学説を丁寧に掘り下げ、どこの箇所が問題かということを詳細に指摘しているだけではなく、両氏の学問的意義・重要性を説いている。本稿でも本来ならば辻善之助・津田左右吉の学説を概観し、吉田が指摘する箇所を丁寧に見なければならないが、ページ数の都合上本稿で最重要と思われる箇所以外を割愛している。

(23) 吉田一彦、2021、「神仏習合説形成史の批判的考察」吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版

(24) 津田左右吉、1964、津田左右吉全集 9『日本の神道』岩波書店

(25) 吉田一彦、2021、「神仏習合説形成史の批判的考察」吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』

名古屋大学出版

(26) 津田左右吉、1964、津田左右吉全集 9『日本の神道』岩波書店

(27) 吉田一彦、2021、「神仏習合説形成史の批判的考察」吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版

(28) 津田左右吉、1964、津田左右吉全集 9『日本の神道』岩波書店

(29) 津田左右吉、1964、津田左右吉全集 9『日本の神道』岩波書店

(30) 吉田一彦、2021、「神仏習合説形成史の批判的考察」吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版

(31) 吉田一彦、2021、「神仏習合説形成史の批判的考察」吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版

(32) 曽根正人も同様に「吉田氏が指摘した護法善神や神身離脱といった仏主神従の関係が、中国の神仏関係のすべてではないということである。（中略）中国の神仏関係全体を照射した上で、その結果を踏まえた日本の神仏関係の洗い直しが必要となる。護法善神説や神身離脱に限らない、中国の神仏関係全体についての解明が必要なのである。」という事を指摘している。（曽根正人、2021、「多神教としての仏教とその東流 ― 東アジア仏教における神仏信仰の基盤 ― 」吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版）

(33) 曽根正人、2021、「多神教としての仏教とその東流 ― 東アジア仏教における神仏信仰の基盤 ― 」吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版

(34) 吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版

(35) 哲学者の内山節は神仏習合に限定していないが、民衆信仰の重要性を説いている。（2020 年 7 月 30 日河北新報朝刊、16 ページ）

(36) 学際的研究の必要性について私は以前発表した論文「社会デザイン研究と学際的研究の可能性」（東海林克也、2019、「社会デザイン研究と学際的研究の可能性」『社会デザイン研究』18 号）の中で述べている。また三橋正も同様に日本宗教史研究の課題として学際的研究の必要性を訴えていた。（三橋正、2002、「日本宗教史研究の課題」『佛教文化学会紀要』11 号）

■引用・参考文献

家永三郎、1966（昭和 41 年）、『上代仏教思想史研究』法蔵館

伊藤聡、2020（令和 2 年）、「宗教の融合と分離・衝突」伊藤聡・吉田一彦編『宗教の融合と分離・衝突』吉川弘文館

東海林克也、2019、「社会デザイン研究と学際的研究の可能性」『社会デザイン研究』18 号

菅原信海、2005、『神仏習合思想の研究』春秋社

鈴木正崇、1993、「神仏習合」森岡清美・塩原勉・本間庸平編『新社会学辞典』有斐閣

曽根正人、2021、「多神教としての仏教とその東流 ― 東アジア仏教における神仏信仰の基盤 ― 」

高取正男、1982、『民間信仰史の研究』法蔵館

津田左右吉、1964、津田左右吉全集 9『日本の神道』岩波書店

寺川真知夫、1993、「神身離脱と神宮寺縁起」『仏教文学』第 18 号

中村元、1966『中村元選集第六巻インド古代史（下）』春秋社

速水侑、1986、『日本仏教史古代』吉川弘文館

三橋正、ルチア・ドルチェ編、2013、『「神仏習合」再考』勉誠出版

三橋正、2002、「日本宗教史研究の課題」『佛教文化学会紀要』11 号

三橋正、2000（平成 12 年）、『平安時代の信仰と宗教儀礼』続群書類従完成会

義江彰夫、2007、『神仏習合』春秋社

吉田一彦、2021、「神仏習合説形成史の批判的考察」吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古

屋大学出版
吉田一彦、1996、「多度神宮寺と神仏習合 ― 中国の神仏習合思想の受容をめぐって」梅村喬『古代王権と交流 4 伊勢湾と古代の東海』名著出版

■新聞

2020 年 7 月 30 日河北新報朝刊、16 ページ

■インターネット

CiNii（https://ci.nii.ac.jp/）最終アクセス日 2021 年 10 月 20 日
日本思想史文献データベース（http://www2.sal.tohoku.ac.jp/dojih/）最終アクセス日 2021 年 10 月 20 日